

# (非)定形節における節境界制限と対併合

白井 悠香

## 1. (非)定形節における節境界制限

数量詞繰り上げ(Quantifier Raising, QR)には節境界制限が観察される。(1)に示すように、数量詞が定形節を越えて移動することはできない一方、(2)に示すように、非定形節を越えた移動は許される。

(1) # Someone said that Sue is married to every man. (# $\exists > \forall$ , \* $\forall > \exists$ ) (Fox (2000: 62))

(2) Someone wants to visit everyone. ( $\exists > \forall$ ,  $\forall > \exists$ ) (Thoms (2016: 297))

この観察は、定形節はフェイズ(Chomsky (2000))を形成し、非定形節はフェイズを形成しないと考えれば説明できるように思われる。しかし、以下の事例はこの仮説の反例となる。(3)に示すように、非定形節の主語が顕在的で、主節主語と異なる場合、(2)とは対照的に QR の適用は不可能である。また、(4)に示すように、仮定法節では、*that* が導入する定形節の形をしているにも関わらず、(1)とは対照的に QR が可能である。

(3) a. Someone wanted for you to meet every woman. ( $\exists > \forall$ , \* $\forall > \exists$ ) (Cecchetto (2004: 370))

b. Someone wants John to visit everyone. ( $\exists > \forall$ , \* $\forall > \exists$ ) (Thoms (2016: 297))

(4) She has requested that they read only *Aspects*. (request  $>$  only, only  $>$  request) (Kayne (1998: 129))

本研究では、(3)、(4)の事例を説明できる形で、(非)定形節の構造を明らかにすることを目指す。

## 2. 理論的背景

本研究では、基本的な統語派生を Chomsky (2013, 2015)のラベリングアルゴリズムの枠組で考える。また、Nomura (2017)に従い、 $C/\nu^*$ から T/R への素性継承と、T/R から  $C/\nu^*$ への内的対併合の順は随意的であり、素性継承の前に内的対併合が生じると、当該フェイズは取り消されると想定する。

さらに、Otsuka (2017)に従い、Epstein, Kitahara and Seely (2016)で提案された  $\langle R, \nu^* \rangle / \langle T, C \rangle$ の外的対併合に加え、 $\langle \nu^*, R \rangle / \langle C, T \rangle$ の外的対併合の可能性も存在すると想定する。後者の場合、前者の場合とは異なり、 $\nu^*/C$ は可視的であり、したがって一致やラベリングが可能となる。

QR の派生に関しては、これが句の内的対併合の一種であるとする Otsuka (2023)の議論に従う。Otsuka (2023)は、英語では対併合した要素は着地点で解釈、元位置で発音されると提案し、これが従来の非顕在的移動にあたると論じている。また、対併合の構造を集合併合の構造に変換する操作である SIMPL (Chomsky (2004))はラベリングの後、転送時に行われることから、QR を適用される数量詞のコピーは、同一の転送領域内になければならないと論じている。

## 3. 提案

本研究では、以下の提案を行う。

(5) a. 非定形の C はフェイズ主要部として導入され、そのフェイズ性は内的対併合により取り消される。

b. 仮定法節は、C の T への外的対併合によって派生する。

## 4. 分析

### 4.1. 非定形節

CP 領域において、T の C への内的対併合が可能であるとする、内的対併合が生じるか生じないか、またそれが素性継承より前に生じるか後に生じるかによって、(6)に示す 4 種類の可能性が考えられる((6d)の可能性はさらなる想定を必要とするため、本研究では(6a-c)の可能性のみを議論する)。

(6) a. 素性継承あり、内的対併合なし → (7)

b. 素性継承あり、内的対併合あり → (8)

c. 素性継承なし、内的対併合あり → (9)

d. (素性継承なし、内的対併合なし)

まず、*for* と埋め込み節の主語が顕在的な場合、(7)に示す派生となる。(7b, c)で、C から T へ素性継承が行われる。主語は T との一致の結果、斜格を付与される。(7d)に示すように、C の補部である  $\delta$  が転送される。その結果、(7e)に示すように、主節段階で埋め込み節の目的語 *every woman* が主節へ移動できないことになる。(7f)に示すように、*every woman* が Spec-C を経由して主節で対併合を行うと、SIMPL の前に行われるラベリングの段階で、このラベルが決定できないため、派生は破綻する。

- (7) a. Someone wanted for you to meet every woman. ( $\exists > \forall, * \forall > \exists$ ) (=3a)
- b.  $\{ \epsilon C_{[u\phi]} \{ \delta \text{you}_{[\phi]} \{ \gamma T \{ \beta \text{you} \{ \alpha <R, v^* > \text{every woman} \dots \} \} \} \} \}$
- c.  $\{ \epsilon C \{ \delta \text{you}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[u\phi]} \{ \beta \text{you} \{ \alpha <R, v^* > \text{every woman} \dots \} \} \} \} \}$
- d.  $\{ \epsilon C \{ \delta \text{you}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[v\phi]} \{ \beta \text{you} \{ \alpha <R, v^* > \text{every woman} \dots \} \} \} \} \}$
- e.  $\langle \text{every woman} \{ \text{someone} \dots \{ \epsilon C \{ \delta \text{you}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[v\phi]} \{ \beta \text{you} \{ \alpha <R, v^* > \text{every woman} \dots \} \} \} \} \} \} \rangle$
- f.  $\langle \text{every woman} \{ \text{someone} \dots \{ \zeta = ?? \text{every woman} \{ \epsilon C \{ \delta \text{you}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[v\phi]} \{ \beta \text{you} \{ \alpha <R, v^* > \text{every woman} \dots \} \} \} \} \} \} \} \rangle$

次に、for が非顕在的で、埋め込み節の主語が顕在的な場合、(8)に示す派生となる。(8b, c)に示すように、C から T へ素性継承が行われる。(8d)に示すように、T の C への内的対併合が生じ、転送領域は T の補部となる。この場合も、(8e)で、埋め込み節の目的語 *everyone* が主節へ移動できない。(8f)に示すように、*everyone* が Spec-C を経由して主節で対併合を行うと、(7f)の場合と同様、このラベルが決定できず、派生は破綻する。

- (8) a. Someone wants John to visit everyone. ( $\exists > \forall, * \forall > \exists$ ) (=3b)
- b.  $\{ \epsilon C_{[u\phi]} \{ \delta \text{John}_{[\phi]} \{ \gamma T \{ \beta \text{John} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \}$
- c.  $\{ \epsilon C \{ \delta \text{John}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[u\phi]} \{ \beta \text{John} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \}$
- d.  $\{ \epsilon <T, C > \{ \delta \text{John}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[v\phi]} \{ \beta \text{John} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \}$
- e.  $\langle \text{everyone} \{ \text{someone} \dots \{ \epsilon <T, C > \{ \delta \text{John}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[v\phi]} \{ \beta \text{John} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \} \} \rangle$
- f.  $\langle \text{everyone} \{ \text{someone} \dots \{ \zeta = ?? \text{everyone} \{ \epsilon <T, C > \{ \delta \text{John}_{[\phi]} \{ \gamma T_{[v\phi]} \{ \beta \text{John} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \} \} \} \rangle$

最後に、主節と埋め込み節の主語が同一である場合、(9)に示す派生となる。(9b, c)で、素性継承の前に、T の C への内的対併合が行われる。C の素性及びフェイズ性は非可視的となり、当該のフェイズは取り消され、転送も生じない。この場合、上記の派生とは異なり、主語の格素性は照合されないため、主節と埋め込み節の主語が異なる場合は、適切な派生が得られない。しかし、本事例のように主節と埋め込み節の主語が同一である場合、埋め込み節の主語が主節の  $\theta$  位置へ移動した結果、主語コントロール文の派生となる(Hornstein (1999))。したがって、(9d)に示すように、埋め込み節の目的語 *everyone* が主節主語 *someone* の上位に移動できる。

- (9) a. Someone wants to visit everyone. ( $\exists > \forall, \forall > \exists$ ) (=2)
- b.  $\{ \epsilon C_{[u\phi]} \{ \delta \text{someone} \{ \gamma T \{ \beta \text{someone} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \}$
- c.  $\{ \epsilon <T, C_{[u\phi]} > \{ \delta \text{someone} \{ \gamma T \{ \beta \text{someone} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \}$
- d.  $\langle \text{everyone} \{ \text{someone} \dots \{ \epsilon <T, C_{[u\phi]} > \{ \delta \text{someone} \{ \gamma T \{ \beta \text{someone} \{ \alpha <R, v^* > \text{everyone} \dots \} \} \} \} \} \} \rangle$

## 4.2. 仮定法節

(10)に示すように、仮定法節では C の T への外的対併合が行われる。(10c)で、主語は  $\langle C, T \rangle$  に併合する。この場合、C は可視的であり、主語は C との一致の結果、主格を付与される。転送は、C と最初に併合した T のみに適用される。(10d)で、 $\langle C, T \rangle$  が主語の上部に内的併合する(Gallego (2014))。埋め込み節内の要素は転送されないため、(10e)において、埋め込み節の目的語 *only Aspects* が主節動詞 *request* の上位へ移動できる。

- (10) a. She has requested that they read only Aspects. (request > only, only > request) (=4)
- b.  $\langle C_{[u\phi]}, T \rangle$
- c.  $\{ \delta \text{they}_{[\phi]} \{ \gamma \langle C_{[u\phi]}, T \rangle \{ \beta \text{they} \{ \alpha <R, v^* > \text{only Aspects} \dots \} \} \} \}$
- d.  $\{ \epsilon \langle C, T \rangle \{ \delta \text{they}_{[\phi]} \{ \gamma \langle C_{[v\phi]}, T \rangle \{ \beta \text{they} \{ \alpha <R, v^* > \text{only Aspects} \dots \} \} \} \} \}$
- e.  $\langle \text{only Aspects} \dots \{ \text{request} \{ \epsilon \langle C, T \rangle \{ \delta \text{they}_{[\phi]} \{ \gamma \langle C_{[v\phi]}, T \rangle \{ \beta \text{they} \{ \alpha <R, v^* > \text{only Aspects} \dots \} \} \} \} \} \} \rangle$

参考文献 Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 1-16, John Benjamins, Amsterdam. / Nomura, Masashi (2017) "Pair-Merge and Feature-Valuation via Minimal Search: Evidence from Icelandic," *Proceedings of the 34th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 395-403. / Otsuka, Tomonori (2017) "On Two Ways of External Pair-Merge," *Proceedings of GLOW in Asia XI*, Volume 2, 135-146. / Otsuka, Tomonori (2023) "On Internal Pair-Merge and Ambiguous Chains," *English Linguistics* 39, 157-190.